【福沢諭吉と渋沢栄一はどんなつながりがあるのでしょう】

令和6（2024）年、一万円の肖像が40年ぶりに福沢諭吉から渋沢栄一へと変わります。明治日本の近代化に多大な貢献をした二人の偉人、福沢諭吉と渋沢栄一には、いったいどんなつながりがあるのでしょう。

福沢諭吉

慶應義塾福澤研究センター提供

福沢諭吉は慶應義塾の創設者として有名ですが、一方で西洋文明の紹介者でもあり、さらには独立自尊を説いた啓蒙主義者でもあります。福沢にはその思想をまとめた様々な著作があり、『西洋事情』や『福翁自伝』、『文明論之概略』などは現在でも名著として知られています。中でも、「天は人の上に人を造らず、人の下に人を造らず」の書き出しで始まる『学問のすすめ』を耳にしたことがある人は多いのではないでしょうか。この啓発書は、当時のベストセラーとして多くの日本人に読まれましたが、近代的・民主的な思想の教授のほか、実学の奨励についても紙面の多くが割かれています。実学とは、いろは四十七文字の手習い、手紙の常用句の学習、帳簿のつけ方、そろばんの練習、秤を使った計量法などを指します。このことは、政治理念の提示やその賞賛だけに終始しない福沢の実務的な姿勢をうかがわせます。

福沢は、天保5（1835）年、豊後国中津藩（現在の大分県中津市）の下級藩士・福沢百助の次男として、大坂・堂島の中津藩の蔵屋敷（年貢米や特産品を売りさばくための倉庫兼取引所）に生まれました。1歳のときに父が亡くなり、中津藩に戻った諭吉は、8歳頃から漢学を学びはじめました。19歳で長崎に留学し、20歳で大坂にあった緒方洪庵の適塾に入塾。23歳の頃には藩の命令で、江戸の築地の中津藩中屋敷に蘭学の塾を開きました。これがのちの慶應義塾の前身と言われています。万延元（1860）年、27歳の時には咸臨丸で渡米し、帰国後は翻訳の優れた才能を買われて幕府の翻訳方に雇われました。

慶應義塾大学旧図書館慶應義塾福澤研究センター提供

明治時代に入ると、福沢は言論人として政府とは異なる立場で様々な主張を行っています。不平士族問題解決のために地方分権を推奨し、木戸孝允と学制を制定したほか、新聞に「国会論」を掲載し、国会開設や憲法制定にも尽力しました。

そんな福沢が渋沢栄一と初めて出会ったのは、栄一が大蔵省に入って間もない1869（明治2）年のことです。栄一は、外国の制度や諸事情に詳しい福沢に、租税・貨幣・土地制度などの確立のための計量の基準を相談するために、福沢邸を訪れました。しかし、そこで栄一がもった福沢に対する印象は芳しいものではありませんでした。自著である『西洋事情』等を取り出して一方的に教え込もうとする福沢は、栄一の目にはどこか一風変わった人物に映ったのです。

栄一は、幼い頃より論語の精神を信条としていました。一方の福沢は、論語の考えに真っ向から反論しました。福翁自伝には、「今の開国の時に、二千年前に行われた教えをそっくりそのまま学ぼうとする者は、とても西洋の文明には立ち行かない」とまで述べています。

こんな相容れないはずであろう2人が親しくなったのは、1894（明治27)年の日清戦争がきっかけでした。清との戦争が避け難くなる中、福沢と栄一は「出征兵士の家族の支援、戦病死者の慰問・弔問計画」を立案すると、役割を分担して事にあたることで意見の一致をみました。福沢は自らが創刊する「時事新報」において文筆で訴え、栄一は企業に声をかけ寄付金を集めました。2人はそれぞれの強みを活かすことで、慈善事業計画の達成に努めたのです。

後に栄一は、福沢について「先生は見識が高く、何事にも屈せず恐れなかった。目の付けどころが鋭い。学者なのに『国の発達は富の力に依存する』と主唱していた点は特に敬服に値する」また、「机上の学問ではなく、実業に活かせる学問をせよという教えである。自分が民間のリーダーとなって西欧の先進的実業をお手本にして日本を発展させようと考えた」と語るなど、その人格に対して大いなる敬意をもって評しています。

一方の福沢も、60歳の時に刊行した「実業論」の中で、「渋沢栄一が、大蔵省の三等出仕を辞めて、民間企業に転じたのは、今から20年ほど前になる。当時の氏の地位は今の次官クラスだが、権力は、それ以上だった。今、偉くなっている連中の中には、当時渋沢の下にいたものが、大勢いる。当時は官尊民卑の風潮が極めて強かったが、成功するかどうかわからない実業の世界に飛び込み、初志を貫き通して今日の地位を手に入れ、今や実業界の渋沢を知らないものはない。大変な栄誉である。もし、明治政府の一員と実業界の第一人者でどちらが栄誉かと尋ねるものがいたら、私は後者であると即答する」と語っています。福沢も、栄一の生き方を尊敬するとともに、その努力に最大限の賛辞を贈っているのです。

活躍の場も考えも異なる2人ですが、互いの存在を意識しながら、日本近代化の先駆者として、新しい時代を切り拓いていったのです。